

その外にも多かり。余は更に多くを言はし、讀者のそれへの判断にまかせん。(完結)

五十三の海山關の旅路より

白洲の上のこゝろやすきよ (村岡)

### 國學と荷田春滿

米

溪

國學とは如何なる學を云ふか、語脈を辿りて文典を正すの云ひか、典籍に涉りて故實に通ずるの云ひか、三十一文字に幽玄の奥を極めて目に見へぬ鬼神をば泣かしむる道なるか。否、國學の精神は歌を詠ずるのみにあらず、文を屬するのみにあらず、豈典籍の間に蠢爾として彼の蠢魚と相去る一步なるもの云ひならんや。文献徴すべきより

二千年、辭は一代の宗として當時を壓せしものはあり、歌は千古を絶して後世空しく仰ぐものはあり、然りと雖も眞に國家的精神を以て我が國の道を説きしもの果して幾許ぞ。文典可なり、倭歌可なり、典古の學決して徒爾に非すと雖も而も此の精神ありて初めて活學と云ふべきのみ、精神なきの學は將た何をか益せん。國學とは斯かる玩弄的の學にはあらずるなり、死屍的の學にはあらずるなり。

徳川氏覇府を開きてより昇平三百年、將門權を弄するもの幾んと八百歳、因習の久しき牢として扱ふべからざるが如き礎をなせるものを倒せしは此の精神に非ずや。精神ある學は以て社會を動かすべし、維新の功は實に學問の力による、而して其の起る所蓋し徳川時代に在り、一道の潮流滔々

として今に及ぶ。維新以來三十年、長足の進歩は實に泰西人士の驚く所なりと雖も、之れ豈明治に起りて明治に成りしものならんや。謂ふに江戸の頃文運の盛なるに當り諸種の思想一時に勃發し、儒佛漸く離れて神道亦起れりと雖も、其の志想自から拘束せられて以て我が國体を發揮するに足らず、偶卓見の士此の際に乗じて起り、曠世の識を抱て我が國の古道を稱へ、慨然身を挺して國民的精神を鼓舞し、國學の基礎初めて此に定まる、吁此の偉人は誰ぞ。

天の此の人を生ずる偶爾にあらざる。陰雲急にして雷電起り、北風吹き荒みて万岳雪に咽ぶ、時乎命乎抑も數あるか。元和偃武生民漸く肩を思ひしより、足利氏文學を無視して擾亂支離遂に社稷を失ひしに鑒み、學事を獎勵し、學者を優待するに至

らざるなく、以て陣頭に收めたる霸業を文學によりて維持せんと欲す、而して之等の學者、稱ふる所は程朱の説のみ。其の後惺窩等の門人漸く多く學者彬々として輩出し、儒佛の二道漸く離るゝに至りしと、神道は尙根底を儒に托するものなり。此の時に當りてや、自習研究の風盛に起りて宋學出で、仁齋徂徠亦復古學を稱へて世に鼓吹するに至れり。

煩鎖なる規則の下に歌學を置くの不可を稱ふるあり、下河邊長流釋契仲等亦万葉の古調を研究し契仲の如きは國學に獻替する所少々ならざりしなり、然れども之れ歌道のみ、未だ我が國の道を發揮せんとせしにはあらざるなり。日本の古道を辿りしものにはあらざるなり。

吁偉人出てざるか。彼の儒道に酔て此の國本を

忘れ、本朝通鑑を撰びては、日本を大伯の裔なりと稱して却て名譽と思惟するものあり、自己の名の漢様ならねばとて、故ら文字を省略して自から得たりとなすものあり、支那を尊ひて中華中國となし自ら夷狄を稱して恬然たるものあり。偉人出でずんば夫れ國体を奈何ん。

天乎時乎抑も亦數なるか、王城の東伏見の里、偉人あり生る。

稻荷山今日は小鳥の音を絶て

音するものは谷川の水

之荷田春滿九歳の時、稻荷祠畔に於て詠したる所に非ずや。森深ふして風聲なく、溪流畫を擅にして鳥何處に在る、黃鳥一たび囀て世春を知る、此の人出でずんば誰れか斯の道を知らん。

春滿謂へらく、日本の道を求め古道古義を唱へ

んとするには須らく之を古文學に求めざるべからずと。

蓋し國各其の体あり、國体の精華は其の特異の光彩を含む所に存し、而して特異の光彩は國民性情の發揮する所に基く、されは國体の精髓を知らんと欲すれば唯其の古道を尋ねて國民性格の基く所を求むるにあらんとす。春滿の古道を稱ふるや寧ろ漢學者の復古説に根せるものなきに非ずと雖も、漢學者流の往々國の大本を忘るゝものあるを慨せしなり。

(ついで)

